

武蔵陵墓地・豊島岡墓地における香淳皇后大喪儀に伴う埋蔵文化財調査

はじめに

平成12年6月16日、香淳皇后は吹上大宮御所において崩御され、7月8日に追号が定められた。香淳皇后の大喪儀のうち、「葬場殿の儀」は7月25日に東京都文京区の豊島岡墓地において、また、「陵所の儀」は同日、八王子市の武蔵陵墓地において執り行われた。陵名は同じく7月25日に武蔵野東陵（むさしののひがしのみささぎ）と定められた。

香淳皇后大喪儀に伴う埋蔵文化財関係の調査については、文化財保護法による手続きをふまえ関係諸機関と協議のうえ、武蔵陵墓地の祭場殿などの各種施設、及び豊島岡墓地内の葬場殿設置等に伴う掘削工事に立ち会った。いずれも遺構は認められず、遺物も豊島岡墓地内で近世の磁器小片が1点出土したのみで、工事は予定どおり施工した。

その後、武蔵野東陵は営建工事が本格化し、各種掘削工事に立ち会った。遺構は確認されず、予定どおり施工した。なお、工事は平成13年度にも引き続き行われ、6月15日に竣工が奉告されたが、この分の調査については、本誌次号に報告する予定である。

1 武蔵陵墓地

7月25日に行われた香淳皇后の「斂葬の儀」（「葬場殿の儀」・「陵所の儀」）終了までに次の(1)～(7)の7箇所を、その後に(8)～(10)の3箇所を調査した（第20図）。

(1) 旧宿舍裏土置場暗渠設置箇所

武蔵陵墓地の南端に確保した土置場に排水用の暗渠（中央部長さ約70m、外周部長さ約60m）を設置することになり、その掘削に立ち会った（幅約0.6m、深さ0.4m）。掘削深度内は表土と自然堆積土の範囲にとどまった。

(2) 参列者休所（現場事務所）浄化槽設置箇所

長さ7.2m×幅5.4m、深さ2.3mを掘削した。掘削箇所の土層は0.1m程度の表土の下に約0.1mの昭和天皇陵営建時の整地土があり、その下約0.2mの自然堆積土が認められた。それ以下では黄色ハードローム層の地山が確認された。

(3) 多摩陵墓監区事務所前水道管埋設箇所

監区事務所前から総門内側を横断する水道管を埋設するための掘削（長さ15m、幅0.6m、深さ0.75m）に立ち会った。表土下には黄褐色もしくは暗茶褐色を呈するローム層が観察されたが、異なる色調のロームブロックを含んでおり、陵墓地造成時の盛土と考えられる。

(4) 新陵前浄化槽設置箇所の立会調査

浄化槽設置のため、長さ6.6m×幅5m、深さ2.5mの掘削に立ち会った。0.1m程度の表土の下は黄褐色のローム層である。この部分は丘陵をカットして平坦にした場所に当たっている。

(5) 裏参道給水管埋設工事箇所の立会調査

給水管の埋設に伴い、長さ14m、幅0.6m、深さ0.8mの掘削に立ち会った。表土である砂利層の下には黄褐色砂礫層が認められ、両者は参道整備時の整地層と考えられる。その下には暗茶褐

色のローム土が検出された。このローム土は比較的均質な土層であるが、上層と同様の礫を少なからず混えることから、本層も参道整備時の盛土と考えられる。

(6) 裏参道電気管理設箇所の立会調査

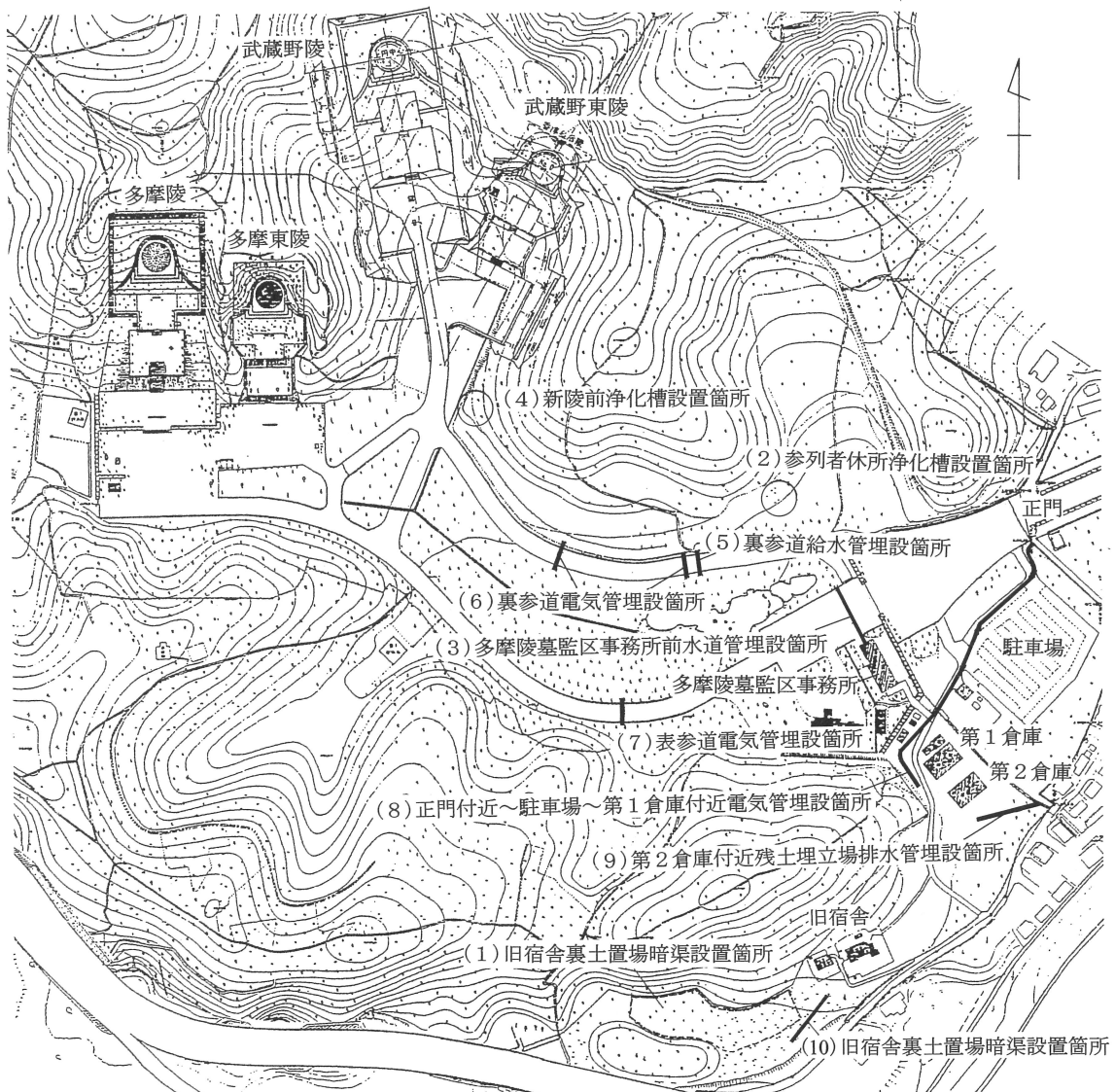
前記の給水管埋設部分のすぐ脇を掘削したところ、基本的には同様の層序を示していた。

(7) 表参道電気管理設箇所の立会調査

電気管路を埋設するために、長さ14m、幅0.6m、深さ0.8mの掘削に立ち会った。層序は表土である砂利層の下に、参道基礎の栗石と暗茶褐色のローム土が検出された。ローム土は比較的均質な土層であるが、他の調査箇所の所見を参考とすれば、参道整備時の盛土であろう。

(8) 正門付近～駐車場～第1倉庫付近電気管理設箇所の立会調査

正門付近～駐車場～第1倉庫付近の延長約168mの区間に電気管を埋設するための掘削（幅1.0m、深さ2.4m）に立ち会った。アスファルト（駐車場を除く）の下にはガラス・ビニールが混入する新しい客土、昭和天皇武蔵野陵造営以前の整地層、自然堆積層が認められる。駐車場の西端では、表土下約2.4mで、第1倉庫付近では表土下約0.2mでローム層の地山が確認された。



第20図 武蔵陵墓地調査箇所位置図(1/4000)

この駐車場西端から第1大倉庫付近の区間は、旧陵墓監区事務所の水道管あるいは現在使用されている電気・水道管が埋設されており、その工事による攪乱を受けている。

(9) 第2倉庫付近残土埋立場排水管理設箇所の立会調査

第2倉庫の南方約10mの位置にマンホールを設け、約35m東方にある既存の雨水排水用開渠に排水管を接続するための掘削（幅2.7m、深さ3.3m）に立ち会った。表土の下には客土、自然堆積土層が認められ、表土下2.3m～2.6mでローム層の地山が確認された。この箇所は戦後に職員が倉庫に仮住まいしていた時に、穴を掘ってゴミ捨て場としていたため、表土下1.0m～1.9mまでは広範囲に攪乱を受けている。

(10) 旧宿舍裏土置場暗渠設置箇所の立会調査

(1)の旧宿舍裏土置場暗渠設置箇所の東端に接する位置に、北東から南西に向って、長さ約36mの排水管を埋設するための掘削（幅2.0m、深さ2.0m）に立ち会った。地表下約1.2mまでは、(1)の工事の際に出た廃土を盛っており、この下に赤褐色土の自然堆積層が確認された。

以上、武蔵陵墓地内の調査では数箇所、ローム層の地山が確認されたものの、遺構・遺物は検出されず、工事は当初の予定どおり施工した。

2 豊島岡墓地

豊島岡墓地は「周知の遺跡」とはなっていないが、西に接する護国寺が「護国寺境内」遺跡（縄文時代）として知られていることもあり、また、かつては護国寺後山として位置付けされていたこともあって、墓地内における掘削工事の際には、陵墓調査室において立ち会うこととしている。

今回、葬場殿の儀に伴う諸施設を設けることとなったため、掘削を伴う場合はこれに立ち会った（第21図）。

(1) 排水管等埋設箇所の立会調査

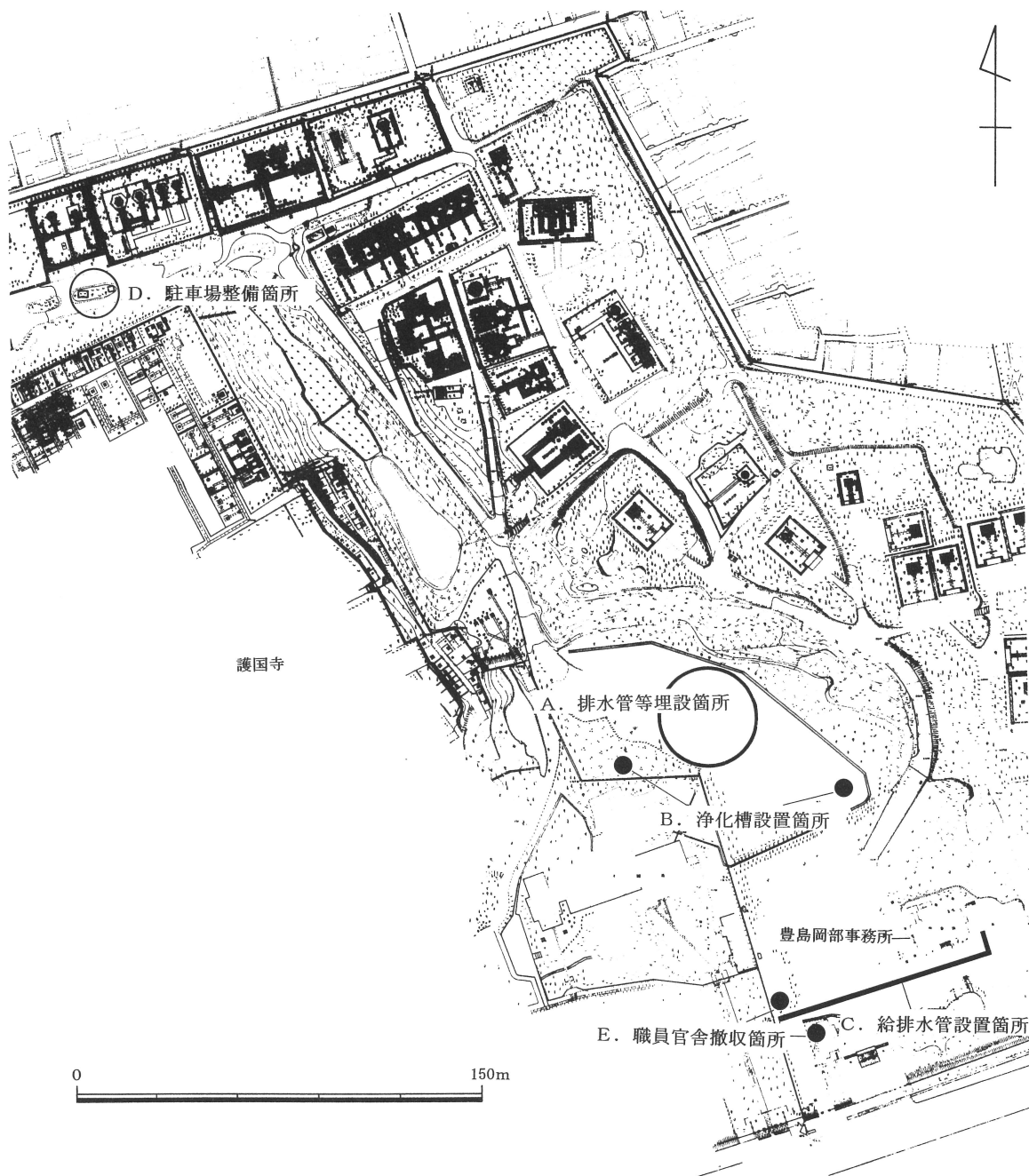
総門奥の広場の葬場殿幄舎建立場所において、最大で約1.1mの掘削を伴う排水管や電気ケーブルの埋設作業に立ち会った。その結果、広場の中央部においては掘削床面近くから磚子等の出土が認められ、明治以降におおがかりに手が加わっていることが明らかとなった。その一方で、墓地側、つまり東北側では固結気味のローム層（ハード・ローム）が地表面下0.8m付近で認められた。本来はこの上に位置すると思われるソフト・ロームや漸移層が認められないことが、注意された。ハード・ロームの上面は平坦で、落ち込み等は確認できない。

(2) 浄化槽設置箇所の立会調査

広場の東隅付近と西隅に各1箇所、浄化槽を設けることとなった。その規模は両者とも長さ約2m×幅約2m×深さ約2mである。

まず、東隅付近の掘削箇所では地表面下約1.3mでハード・ロームとなった。その上位の層の盛土中からは、江戸後期の磁器の小片を1点検出している。同約1.8m以下のレベルでは湧水が激しく、本来は谷部分にあたることを示すのであろうか。

一方、西隅の掘削箇所では地表面下約0.6mで山（西）側から緩やかに下降してくるローム層



第21図 豊島岡墓地調査箇所位置図(1/2500)

を認めた。ローム層は下位に行くにつれて、固結の度合いが強くなっていく。この場所では遺物は認められなかった。

(3) その他

① 参集所前(南)面を給排水管が横断することとなった。そのほとんどは露出配管であったが、一部掘削を伴う箇所があり、最大で0.6mほど掘削した。いずれも盛土内の再掘削であった。

② 陵墓地最奥部付近の東久邇宮墓地の南側通路部分に駐車場を設けることとなった。この部分には樹木の植採された二つの島状の高まりがあり、これを削平し、その周辺を含めて均一にならすため、最大0.2mの掘削に立ち会った。掘削は盛土内にとどまった。

③ 通用門から入って正面、及び東側には各1棟の職員官舎がある。今回、この撤去に立ち会

ったが、木造建物であったこともあり、旧地表面をならす程度で、本格的な掘削には至らなかった。

以上、豊島岡墓地内の調査においても遺構は検出されなかった。今回の調査の対象区域は貞明皇后の大喪儀や秩父宮雍仁親王などの皇族の葬儀の際にも、関係施設が敷設された箇所であり、明治以降幾度となく掘削や盛土がなされた場所でもある。今回の調査においても、このことを再確認しえたことが大きな成果であろう。

以上の結果、工事は予定どおり施工した。

(福尾正彦 佐藤利秀)

智成親王墓下水道工事箇所の立会調査

比叡山と如意ヶ嶽の間に発した白川は、山間を抜け出て丸山の山麓を大きく迂回し、北白川扇状地を形成する。その丸山の西麓に、北白川宮初代の智成親王の御墓が位置する。丸山の西裾部は道路や民家、さらには本墓のために数段の崖状を呈しており、その壁面には花崗岩や硬質砂層(バイラン土)が露呈している箇所もある。本墓付近では縄文土器等は採集されていないが、現在の白川が南流するその西側では、縄文各期の遺跡が立地し、北白川遺跡群を構成している。

この度、智成親王墓地内に公共下水道管渠を設置することとなり、平成13年9月4日～8日、その掘削に立ち会った。本墓では昭和59年3月の参道石張工事に伴う立会調査(本誌第36号)の際などに、布目瓦や近世土師器の出土が報告されていることもあって、事前に京都市下水道局、および京都市文化市民局埋蔵文化財調査センターと十分な協議のうえ、調査を実施したものである。調査に際しては、同センター長谷川行孝技師に種々ご教示を賜った。記して感謝する次第である。

公共下水道管渠は参道を上がったところ、つまり陵前の西側約4m(A区間)を横断し、ほぼ直角に曲がって参道北側の小土堤の内側に沿った約35m(B区間)の区間に設けることとなった。その幅は約1m、深さは最大で約2.3mである(第22図)。

調査の結果、表土(I層)下は瓦礫に近世の土師器や陶磁器を混えた盛土(II層)となっており、一部で非常に堅い灰褐色バイラン土の地山(III層)が認められた。地山が確認されたのはB区間のほぼ中央部と西端部分のみで、その上面には掘り込み等の遺構は確認されなかった。地山はB区間の中央部が最高所となっており、白川方向に緩やかに下降する一方、丸山方向にもわずかに傾斜している。つまり、地山の確認範囲に制約はあるものの、当域の東側は窪地もしくは平坦に近い地形を呈していたことがうかがわれ、包含遺物から近世(おそらくは18世紀)以降、智成親王が当地に斂葬される明治5年(1872)1月29日までに大がかりに盛土されたと考えられよう。この盛土の上面には、掘込み等の遺構は確認できなかった。B区間の中央東側部のIIa層とした層位の下面は、他の部分に比べて黒味が強くなっており、旧表土面であったとも考えられる(第23図)。

出土品としては、土師器、陶器・磁器、瓦の破片72点である。このうち、もっとも多いのは